

## 青年期前半を「語る場」としての学生相談室の役割

A Study of the Role of Student Counseling Room as a Space of the Narrating the Student's Early Adolescence

森 陽子

The purpose of this paper is to consider the role of the student counseling room as a space of the narrating of the student's early adolescence. This study presents two cases of students who tried to re-tell their traumatic experiences. First case is successful. On Second case the client was able to narrate his early adolescence. But he was not able to re-tell his traumatic experiences deeply with psychotherapist. Therefore his developmental subjects were not achieved fully. These findings suggests that the student counseling room as a space of the narrating of the student's early adolescence has very important role.

key words : student counseling room , early adolescence , re-tell, developmental subjects

はじめに

日本学生相談学会の2000年4月の調査によると、学生相談室は4年制大学、短期大学、高等専門学校など、我が国の高等教育機関およそ600に設置されている(学生相談学会特別委員会 2001)。主に在学生(大学院生や研究生なども含む)を対象とし、学生生活に関するあらゆる相談を受ける相談機関である。上記の調査によると、近年、学生相談室への来談実数および来談率は、ともに増加している(図1)

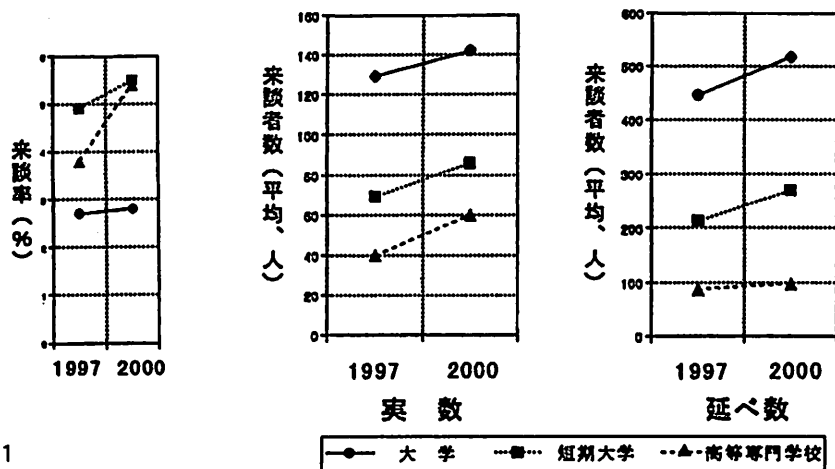


図1

来談者実数と延べ数の変化

社会情勢の変化、少子化による18歳人口の減少に伴い、大学はさまざまな組織改革や教育の見直しを迫られている。多くの大学で大学院生や社会人学生、留学生が増加しており、最近は一とくちに学生といっても、18歳から20代前半を大多数としながらも、30代や40代はもちろん、それ以上の年代層まで含む。また短大・専門学校などからの4年制大学への編入学、さらに留学生など異文化からの学生の増加、さまざまな推薦入試や大学入学資格検定を経た入学生などによって、学生はますます多様化する傾向にある。そしてようやく大学内でも、学生や教職員の人権意識が高まりつつあり、学生相談室はセクシュアルハラスメント、アカデミックハラスメントなどの相談窓口ともなっている。学生相談室の窓は小さな窓だが、そこを通して学生からの悩み相談や問題提起にかかわる過程で、変容する大学の姿も、変貌する学生の姿もつぶさに見せてくれる。

筆者が学生相談活動を経験した、短期大学での実践報告(1998)、私立4年制大学および国立4年制大学での実践と、藤原(1998)のあげる今日の新しい学生相談像の基本的視点を参考として、学生相談の役割について考えてみよう。

まず学生相談の基本は、学生の主体性や自発性を尊重した個別相談活動である。教員や家族からの依頼によることもあるが、学生自身の自発来談によることが多く、本人の欲求からスタートする。大学生となると、学生生活全般において学生は自立した一人の人間とみなされ、その主体性にかなり依存している。自発的に学生相談室での相談を申し込むことから始まって、継続的に相談室を利用する学生は、カウンセラーの援助のもとに自ら成長する力を養っているともいえるのである。しかしながら、いまだに一部の大学教員や学生には、学生相談室は、心理的に弱い学生や精神病理をもつ学生が頼っていくところであるとの認識をもたれているとしたら、非常に残念である。

ところで学生相談は、全学的な学生教育システムの一環である。医療のように、何らかの症状を抱え、診断、薬物治療などの治療が必要な、いわゆる患者を対象とするのとは違う。学生相談室は比較的健康度の高い学生に対しても開かれた相談システムである。そして多くの学生が現在問題を抱えておらず、また悩んでいなくても、相談にかけ込む所が大学キャンパス内にあるだけで、相談に応じる専門家がいるという安心感が生まれ、精神安定につながるものと思われる。

大学によっては学生相談室に常時インテーカーがいたり、面接室以外に学生談話室があったりして、相談以外にも立ち寄る場所、「居場所」となっている。対人関係を苦手とし、出会いの乏しさを嘆く現代の学生たちの中には、こうした談話室につどい、友人関係を求める学生もまれではない。

また学生相談では、学業など学生の現実的問題を接点にした相談活動が行われることが多いことは、以前から指摘されている(藤原 1998)。何か精神的な問題を抱えているときにも、まず学業に関する訴えで来談する学生が多い。すなわち、履修の仕方が分からない、単位が取れなくて留年しそうだ、授業に出てもつまらない、学問に興味をもてない、卒業論文や修士論文に着手できない、

指導教官と合わない、大学院に進学したが研究が進まないなどの訴えである。

そして毎年のように、不本意入学や入学後の期待はずれなどの理由をあげて、再受験の相談に来る学生がいる。その背景には、エリクソンのいう根こぎ感 (uprootedness) の存在が感じられる。新入生の相談では、定着すべき新しい土地になじまないこと、家族からの分離と生活支援者の欠如、慣れ親しんだ強迫的な受験生活への愛着などが見え隠れするのだが、前面に出てくるのは大学での学業の悩みである。

筆者は、学生相談室などの援助で、学業上の達成感が得られると、学生の精神保健的な問題も大きく改善するという印象をもっている。仮に何か精神疾患が疑われ、精神科の治療を受けている事例でも、学生相談室でのサポートは医療と別の意味と役割を担っている。医療での診察や薬物投与と、学生相談での心理的サポート及び修学援助は、車の両輪のように進むものだろう。学業を核とした大学生としての本業と日常を支えることが、青年期の精神疾患などの回復期には、一種のリハビリテーションになると考える。適切な援助があれば、精神障害の場合でも、学生生活に復帰して学生生活のサイクルに乗っていくことで、回復を早めることがあるという感触を得ている。

近年それぞれの教員が、オフィスアワーなどの時間帯を設けて、自分の講義などに関する質問を個別に受けつける体制をとる大学が増加している。ある学部の教授談(2001)では、オフィスアワーでの講義内容に関する質問をきっかけとして、カウンセリングの非専門家である自分が、精神保健的な問題から学生生活全般の相談まで受けざるを得ないことに戸惑うとのことであった。大学内に学生相談が定着するにつれ、自らの範囲を超えた相談内容と感じた教員からは、学生相談室へカウンセリングの依頼がくることも多くなった。学業から私生活にいたるまで、大学教育においても個別に学生支援していく必要があると、教員の多くが感じ取っている

ところで筆者は、10歳から30歳までのおよそ20年間を青年期とするならば、その中間地点にいる大学生に対し、「過去とくに青年期前半を清算」あるいは「入学以前の未整理の問題を解決」するため、「語る場」を提供することが、学生相談室の役割のひとつではないかと考える。とくに入学してしばらくは、青年期前半に積み残してきた、あるいは棚に上げてきた課題を大学入学後に取り出してきて、もう一度悩んだり解決しようと試みたりする場が必要とされる。それが、表面的には学業の悩みや転学部の相談であっても、そちらは重要ではなく、いつのまにか後退して、最も語りたかったことが繰り返し登場してくる。

あるとき筆者は、某大学の学生相談室で、3年生の女子学生から他大学への編入か再受験かの相談を受けていた。その際、大学への不満よりも、不本意な高校に進学したことが、大学生である現在の悩みとしてどこにもおさめられず、面接に繰り返し登場し、いささか奇異な印象をもった。少なくとも大学入学を果たしたからといって、中学における進路指導の教師とのわだかまりや、その結果としての不本意な高校入学をめぐる葛藤が、帳消しになっていない。大学生が中学3年生に戻って受験勉強したり、高校入試をやり直したりすることは

不可能であり、現実にはやろうとは思わない。しかし彼女は、「悲しみのようなわだかまりを心の片隅から追い出すことができない」と高校受験のことを繰り返して語っていた。これが大学再受験につながっているようだった。

中学の頃の過去にこだわっており、大学を変えて別の勉強がしたいとは言いつつも、他大学の情報を収集したり、編入試験に向けての勉強を開始したりということはあまり進まなかった。最初は転学部以外にどのような内容の悩みがあるのか分からず、高校受験の際の外傷的体験について具体的に話し始めるまでに、相当の期間面接をもった。無念さと悔しさを何かで補償しないと元の自分には戻れないということで、転学部なのだろうか。元の自分とは中学前半の頃をさしており、高校生活は楽しいこともあったという。

結局、他大学への転学への具体的な試みはされないままであった。おそらく友人などにそのような悩みを打ち明けても、過去の問題として一笑に付され、相手にしてもらえないのだろう。家族も聞き飽きているのかも知れない。どうにかしたいと思うのであるが、数年に渡って片付けようとして片付けられずにきたという。

一般に中学・高校では、担任教師との個別面接の機会はあるのだが、目下の勉強や進路の内容に終始しがちで、時間をさいて内面を語る場にはなりにくい。大学入学後も、そうした個人的なこころの問題を話す場は、キャンパス内外に案外、見つけにくいのではないか。こうした青年期の近い過去における「自分」「学校」「家族」「友人」などについて語り、中学・高校あるいは大学入学直後といった青年期前半に、保留としてきたテーマをあらためて俎上に乗せたいと思う学生がいる。整理したり意味を考え直したりして、語りながら解決の道をカウンセラーと共に模索する、ひとつの場が学生相談室ではないか考える。

ここで、「語る」と述べているのは、ただ話すとか、しゃべるという以上の意味である。森岡（1999）によると、個人に生じた出来事のなかでも、外傷的でなかなか受容しがたいことは、物語の構造によって経験として区切りとられ、心に収めることができるとされる。そして、心に収めるための物語生成にとって、語り直し（re-telling）が重要であるという。それはこれまでの体験をありのまま話すのではない。例えるならば、写真で切りとるのではなく、実体験を心の中で再構成し、自分にとって重大な意味を持つ事柄を誇張したり、感情で色づけ表現したりして、自分のキャンパスに描きなおすことであると筆者は思う。

山口（2001）は、学生相談における卒業期の傷つき体験の語りと自己の修復について論じている。そして学生相談では、「語り」を多義的に聴くこと、「成長や回復といった救済のシーケンス」で聴く姿勢が物語モードによる思考を広げ、自己の語り直しを促すとする。筆者は、こうした学生の「物語ること」を傾聴し、肯定的な文脈で聴くことを学生相談の中で実践したいと考えてきた。

以下に取り上げる学生相談事例は、ともに入学して半年ほど経過した後期に来談し、上記のようなやり残した課題について語った事例である。1年次の後期は大学生活への外的適応には一応成功して、前期に取得予定だった単位がほぼ取れた場合、新入生がほっとする頃かと思われる。そのころ改めて、意識的ま

たは無意識的にこれまで棚上げしてきたことが、重大な問題としてとりだされるようだ。そして、「1年生の時期(入学期)は今までの生活から新しい大学生活への移行期であり、学生がさまざまな悩みや課題を契機として『もう一つの(学生の側からの)オリエンテーション』に取り組み、そしてその取り組みが4つの型に分けられる」とされている(鶴田, 1991b)。

#### 事例による検討

以下に取り上げる2事例は、入学期の後半にさしかかった1年次後期に、自発的に来談している。1例目は、面接回数も1回と少なく、精神的健康度が高いと推察された。2例目の学生は、大学生活に目立った不適応はなかったが、語っても語っても、語り尽くせないというほど、青年期前半に多くの遺り残した課題を抱えていた事例である。また入学直後にアルバイト先で外傷的ともいうべき体験をしている。そういう意味で、内的には苦渋にみちた学生生活であったという印象をもつ事例である。

##### 1. 2事例のキャンパス状況および学生相談体制

この大学は、大学学部、大学院をもち、大学院生、学部生あわせて数万人と大規模の私立大学である。公共交通機関が便利な都市型大学で、理工系学部と社会科学系学部から成り、男子学生が8割程度を占める。この学園は大学付属校を含む地方の伝統ある私学であり、全国大会で名をあげるような運動部、サークル活動も活発で、地元では企業などに先輩の強いネットワークがある。

当時、学生相談室は週末以外の5日開室しており、臨床心理士の非常勤カウンセラー5名(内2名は学内の心理学教員)のいずれかが面接相談を行っている。精神科医も予約制で2週に1回の診察日を設けている。学生相談室は開室して数年とまだ新しいが、相談体制は整いつつあった。学生相談窓口である保健管理室には常時保健婦がおり、相談申し込みはもちろん体温測定やベッドでの休息ができた。さらに内科医も週1回診察日を設けている。大学には夜間部もあるため、夜9時まで常に学生相談の相談受付をしている。

以下は、筆者(学生相談室非常勤カウンセラー、以下 Co と略)の面接によるものだが、プライバシー保護のため、内容に若干の変更を行っている。

##### 2. 事例1 かつみ(仮名)

このケースは、自発来談で初回面接し、次回を約束しながら、その後は来談しなかったものである。比較的、健康度が高いと推察される事例である。

かつみ(仮名)工学部(2部)建築学専攻1年次在学の女子で、後期が始まった10月に来談した。Co に対する話しぶりは、最初からそれほど深刻ではなく、よどみなく話が展開した。小柄で派手なところのない彼女の家族構成は、両親と兄で市内に同居している。公立高校からストレートで進学、昼間は家業を手伝い、夕方から大学2部の授業に出る多忙な毎日である。これまで中学から高校時代にかけて、受験勉強と塾通い、運動系部活などで帰る時間が遅く、帰宅後晩御飯は用意されたものを一人で食べて、疲労困憊のままばたんと寝る状態だった。家族と同居していながら接触する時間がなかったという。

そんな風にすれ違いで、両親や兄とまともに向き合ったことがなかったが、

大学に入って時々夕食を共にするようになり、初めて親とゆっくり会話するようになった。時間的余裕ができて一家団欒でほっとするはずだったが、なぜか次第に両親と対立し、口論するようになった。それまで親に反抗したことなどなく、「反抗期は自分にはなかった」のだが、これまでになく居心地が悪いという。

父の後継者を期待されていた兄が大学進学しなかったこともあり、長女であるかつみが父親の営む建築設計事務所の後をつぐべく、工学部建築科に進学した。ところが大学で勉強してみて、もともとデザイン的なことは好きなのだが、果たして建築士としてやっていけるか、本当にこれが自分のやりたかったことか疑問に思うようになった。進学先を決めるのに親に説得されたとか、よく話し合ったとか、自分自身とても悩んだという記憶はなかった。親の跡をつぐことに何の疑問も感じず、この地域で建築設計事務所をやっていくにはこの大学が有利ということで、すんなり来てしまった。今になってかつみは、もっと適性をよく考えればよかったか、この道が良いかと悩み、学生相談室に来談した。

彼女は、初対面の筆者にも多弁に語って、疲れを知らない感じだった。父親の建築設計の仕事内容は、門前の小僧で大体見当がついたという。実際、高校生からは手伝ってもおり、深く考えもせず、アルバイト感覚でこの道に入ってしまった。今すぐ大学を辞める勇気はとてもないが、本当は舞台での演劇に興味があり、裏方で大道具の仕事がしたかったなどの夢が語られた。今の仕事(家業手伝い)をやめ、大学も休学して、東京の劇団で半年の間、自分の力を試してみたいと親に願い出ようかと思っていると、話してくれた。

Co は傾聴する過程で、このようにあらためて進路選択やこれまでの家族関係について考えてみることで、大変意義があると伝えた。そして以上のような内容をじっくり聞いたあとで、「それではあなたが本当は何をやりたいのか、ゆっくり学生相談室で一緒に考えましょう」と次回の面接を予約してもらった。ところが次回の面接日直前になって、「今日は都合が悪いから」とキャンセルの電話が入り、以後、来談していない。

### 3. 事例2 ツギオ(仮名)

かつみの事例と同様、入学期後半12月に自発来談したが、面接の回数を重ねるにつれ、精神的健康度の低さを感じたケース。来談学生ツギオは社会科学系学部に在学し、初回面接時19歳の男子学生。体型はやせ型で、色白、めがねをかけている。市内公立高校から現役入学し、自宅通学している。

家族構成は50代の両親と社会人の姉(別居、20代半ば)である。父親は会社員、母親は現在専業主婦であるがパート勤務もしていた。二人とも特別に教育熱心とか、過干渉ということはない。しかし父親はツギオの少年時代には、いそこちを誘って一緒にスキー旅行をしたり、大学入学後も市民マラソンに親子で出場したりするなど、内向的な息子を外に連れ出し、積極的に行動することを奨励してきた。今も「何でもやっておくことに越したことはない」と、ツギオにアルバイトや資格試験を勧めたり、願書を取ってくれたりする。ツギオによれば、姉は長女として父から鍛えられたというが、第2子の自分は、待望の男

子であり跡取りであるということで、過保護にされがちであったという。高校時代、彼が荒れた時には、「宝物のように思っている」との趣旨で父から手紙が来て、長くそれを保存していた。

2 年余の面接過程を以下のように5 期に分けて、ツギオの語ったことを中心に考察する。また 初回面接とその他の面接の一部を紹介した。面接過程のうち、[]内は筆者 (Co) の対応や感じたこと、その他を記した。()内は補足である。

第1 期 (199x 年 12 月～翌年 1 月末 1 年次) 第1 回～第2 回

出会いと信頼関係が生まれた時期。

ツギオが大学内の「居場所」を求めて自ら相談室へ、Co と出会う。年明けの後期末に授業が終了するまでの2 回。来談の動機や当時の心理状態と、アルバイトでの外傷的体験を話す。

初回面接 (199x 年 12 月申し込み日当日)

[ツギオが人前で言いたいことがすぐ出てこない、書いたものを持参したのが印象的。面接の終わりに、1 回につき約 1 時間の予定で継続面接して行くことで合意した。学業を優先し、2～3 週に 1 回の来談を原則とする、緩やかな構造をとった。]

1 週間に 1 回くらい人生に絶望を感じてしまう。根本的なこと、将来のこと、今何をやらなきゃならないかとか考えて。ものすごく絶望したときはここに来ようと思っていた。今日はすっきりしているが、波があって落ち込むといらいらす。そういう時、母親に「生まなくてよかった」などと暴言を吐いたり、物を投げたりして夜に落ち込む。今は大学に来て授業を受けているだけ。身が入っていないし何もしていない。(大学生なら) バイトやサークル活動をしているのが普通なのに (アルバイト先で、外傷的体験があり短期間でやめたエピソードが語られた。これは青果問屋での作業アルバイトで、要領が分からず肉体労働もきつかったこと、年配の女性以外の同僚・先輩の男性たちとは全く口が利けず、10 日間、心身ともになかなか辛抱しながら働いたが耐え切れず止めてしまったこと)。僕は社会から置いてきぼり。基礎ゼミのパーティーとかコンパは人となじめず苦手だが、こういう体験はこれからの人生にとって必要と思う。

高校時代は部活 (ハンドボール部) をやっていたが、いつも「怒られ役」で何か孤独感を感じ、「居座れる」グループというのがなかった。人づきあい、充実感を求めて入った部活だが居場所とはならなかった。もうこんな思いは絶対したくない、大学ではやらないでおこうと決心してサークルに入らなかった。

[ツギオは表情をあまり変えず、間をおいて小さな声でポツリポツリとゆっくり話すが、気まずい感じはあまりなかった。思ったことが出てこないという割には、よくしゃべった。しかし Co はじつと耳を澄まし、緊張して注意深く聞く必要があった。Co はツギオに、「遅くとも卒業時点をゴールとし、あなたのいう大学やバイト先でなじめなかったことなど対人関係問題、将来のことなどをここで話しながらか解決していけたらよいのではないかと提案した。そのとき、彼は「僕の問題は卒業までに解決しようと思っても無理だと思う」と答えた。3 年以上先の卒業時点をタイムリミットにする、比較的悠長なプランと思って

提案したのであるが、「それは無理」と確信的に言われ、Coは出鼻をくじかれた気がした。ツギオはとても困難を感じ訴えは強いながら、問題解決にそれほど積極的とはいえず、この時点で明確な共通の目標をもてなかった。]

第2期(2年次4月～翌年3月)第3回～第21回

青年期前半を振り返ってどこにも「居座れなかったこと」を語った時期。

高校時代からの友人関係と辛かった部活の回想、大学入学当初のバイトでの外傷的体験をツギオが繰り返し話す一方、子ども時代からの家族関係の葛藤や、高校から大学生になった現在まで、同世代との対人関係がもちにくいことが、さらに明らかとなる。その後、現在進行形の話として、二人の友人との交際、簿記検定3級試験へのチャレンジと合格、楽器店主催のボーカル体験レッスンへ参加、市民マラソン挑戦など、様々の達成感も味わったことが話題となる。

しかし翌年1月以降には、簿記検定2級試験の回避、インフルエンザ罹患などでツギオが退行的となり、親子間が不安定となった。成人式の不参加にこだわり、3月の姉の結婚式への出席をやめようかと悩んだ末、勇気を出して出席し、感銘を受けたことなどが、語られた。

第3期(3年次4月)第22回～第24回

仕切りなおしの時期

年度初めでもあり、3年次になったということで、面接を深めていこうとしたCoは、面接を1週間に1度と間隔を短くし、より定期的に行うことをCoから提案して、ツギオは快諾したようにみえた。その後、面接に2度遅刻、ツギオがCoに否定的な感情をぶつけ反応を見た時期である。ツギオより来談を中止することのほめかしがあり、双方の話し合いにより面接を一時、中断すると決める。

2期の大きな出来事として3期の初めにあらためて報告されたのは、3月初旬の姉の結婚式であった。姉の交際や婚約については、以前から面接で少々話題にしていた。自宅に婚約者が来たときに、ツギオはあいさつのみ交わして、後は自室に隠れていたとのエピソードも語られている。ツギオは大勢の人前に出る緊張感を訴えて、出席をためらっていた姉の結婚式に勇気を奮って出たことを語った。姉が美しい婚礼衣装姿で涙を流し、両親に感謝の気持ちを述べる姿を見て、ツギオはとても感動したという。面接場面では、「晴れ姿の姉に比べ僕は」という劣等感を感じたと述べながらも、全体的には感銘深い出来事として報告された。無快楽的な彼には珍しいことであり、Coは「頑張って出席した甲斐があったね」と感動のお裾分けにあった気持ちで、出席できたことを喜んだ。

第24回面接 4月末(第3期の終わり)

[15分ほど遅刻。暗く沈みがちな雰囲気、消え入りそうな声で元氣なく、最初に「ここで一言だけ言って、もう来るのをやめようと思って来た」と言う。いつもより長く、1時間半ほど在室、こちらも緊張して聞く]

この1週間ずっと怒っていて疲れた。(私に?) [・・・無言]ここに来て色々話して来たが、Coの考え方がよく分からない。昨夜は父と言ひ合い。父は僕のこと「考えてやっているのに何が気にいらぬのだ。」と攻撃的口調。その前に水道が出しっぱなしのことで、母の答えがなっていないので、1時間ぐらいいし



やべっていたら母が疲れてきて、父が「やめておけ」と介入。僕は母に教えているつもりなのに、責めている風に聞こえるらしい。簿記の2級試験を受けなかったこと、父は知っていたのに知らん顔していた。(今回の試験は自分から申し込んだわけだが?)

父にはお金を出してもらっている。僕がやる気なくして「まあいいや」で受けなかった。父は元来あまり何も言わない人だが、こういう時に声をかけてきて欲しい。僕が本当に悩んできたことには触れず、するのは野球の話くらい。「何事も親がヤレヤレと言うと嫌だろう」と父は言うが、過干渉しろとは言っていない。父が真剣に僕のこと本当に考えているかどうか。父はいつも「甘えとるだけ、逃げている」と。(本当に悩んできたこととは同世代との対人関係のことと、これからの生き方や進路の事ですわね)

Coに感謝しなくちゃいけないと思うが、こちらが同じことばかり素直にしゃべっていてもどうかと思うし、分かってももらえてない気がする。いつまで話していても何のアドバイスももらえない。先週の成人式[行きたいけど行けず、道で会った同級生に『ヤバイジャー』と言われる]の話で、僕の気持ちが分かってももらえてないと思った。カルチャーショックみたいのを受けた。

(カルチャーショック?確かにあまりアドバイスはないが、その都度対応してきたつもり。あなたが自分で考えたり関わったりするのをサポートする役目だから)

Coの哲学が分からない。(哲学というのはとくにない。面接の方針ということ?今、いろいろの人間関係から身を引こうとしていますね。それがあなたの意志であれば、一人でやってみるのもいい。今後、相談室に来るか来ないかはあなたの判断にまかせる)

[これに対してツギオは肯定も否定もしなかったが、入室したときの緊迫感は次第になくなり、表情は柔らかくなって途中には笑顔もあった。Coとしては面接継続を考えていたが、面接を止めるのが彼の本意ならその方がよいと思った。Coに向けられた「分かってももらえていない」という言葉は、日ごろ家族とくに母親に向けて発せられてきたのと同様であることから、彼のCoへの転移も推察される。この時期に面接の中断ないしは終了をもちだすのは、面接の流れからは何か唐突で不自然であり、その時はピンと来なかったが、後で考えてみると、ツギオに試され揺さぶりをかけられたとも言える。家庭内では、何度も母親をこのように揺さぶっていたのだが、ツギオは母親の対応にはいつも不満をいいていた。]

#### 第4期(3年次6月から年度末まで) 第25回~第40回

[ブランクの後、仕切り直しで面接が再開され、年度末にCoの都合で直接の面接を終了となるまでの時期。1か月半余り中断後、双方からの意図で面接再開し、Coとの仕切り直しと信頼関係の復活、ツギオの主体性による面接展開がみられ、母を相談室に連れて来てCoに面接させる。ツギオが結婚した姉に手紙を出し返事が来た話から、高校時代頃まで自分のモデルとしてきた姉との関係を話題とする。]

第25回 面接 199x+2年6月

〔面接中断から1カ月ほど立ったところで、様子が気掛かりなので、近況を聞くCoからの短い手紙を郵送した。ところがちょうど彼が学生相談室への来談申し込みをして帰宅すると、筆者からの手紙が届いていたので、その同時性に驚いたとのこと。〕

前に比べ生活リズムができ、3年のうちに全部単位をとると決めたから、毎日大学に来て受講している。専門の講義は興味もてるし、気持ちがスッキリしている。変化としては、一人でいることが苦痛でなくなってきたこと。元ゼミの仲間など知り合いに授業で会っても、自分なりのけじめができた。しゃべりたくなったらしゃべるし、特にその気にならないときはしゃべらなくても平気。寂しいなあと思うこともあるが、一人のほうが寂しくないという気持ちもある。〔明るい印象で一皮むけた感じ〕心療内科が近所にあって行こうかと思ったことがある。去年は時々頭痛があったが、今はない。学生相談室は治療するところではなくて、僕がいろいろ考えて話すところ。

〔Coの役割について先回伝えたことが受け止められたといえる。家族に対する認識は相変わらずで、母、姉に対して依存的。彼の提案で次回に母も来談することになった。〕

第26回 6月末 母親面接

〔ツギオとともに母来室、最初母のみと、同席面接を経てツギオのみと面接。Coは母に対して、ツギオが言う物分かりの悪さや、通じなさは感じなかった。ただ「私の育て方が間違っていたから」と自責的に言われるのが気になった。母親の目から見て今は(ツギオの不安定さが)中休み状態だが、就職活動で不安定になるのが心配とのこと。家庭内でも、以前のように物にあたるなどの暴力はなくなっているという。〕

ツギオが幼い頃は体が弱く過保護だったと思う。とても自立的な子であった姉には、親の方が引っ張られっぱなし。ツギオは母に何でもよく話すので、気持ちが手にとるように分かる。姉は何をやってもプラスになるのに、ツギオはそれとは反対でマイナス効果になってしまうようで。ツギオからはのべつまくなしに話を聞かされ、分からないのでただ聞いているだけだと、ツギオには「分かってほしい」と非難されるという。

子どものときから感受性の強い難しい子で、決して気の長いことはなく、パンパンにふくれた風船のよう。こちらは常にハラハラ見守っている感じ。

〔この後、ツギオも同席。「(母親の)僕への気持ち(愛情)が薄らいでいるのかも知れない」とツギオが言うと、母が「そういうこともあるかも知れない」と。

〔息子は母親の手には負えず、その依存性にいささかうんざりしており、「父親にバトンタッチしたい」との母のことばと併せて考えると、母子の認識のズレがよく分かる。〕

〔つづいてツギオのみと面接した。Coは母親に対して、彼が言うほど理解力のない人という印象はもたなかったことを伝えた。母親面接はこれ1回であるが、この頃ツギオが何の資格をとるべきか「母親が僕といっしょに調べてくれ

るべき」と訴えていた。「Coの私も、あなたが何の資格をとるべきかよく分からないが、同様にお母さんにも答えられないのではないかと述べる。強い母親、理解力や指導力を示してくれる母を望む息子に、戸惑う親の気持ちもCoは共感できた。そこでツギオには、Coが母親にも共感できる部分があったことを伝えておいた。今後は家庭内で退行させすぎない枠やルールといった、父性的な枠組みも必要と感じた。その後、面接はほぼ2週間隔に落ち着いて、夏休み中にも3回の面接がもたれている。7月からの就職ガイダンスに出たりするようになり、10月のガイダンスではパソコンが必須といわれ自宅にパソコンを持っていない彼は不安となる。また就職課職員とのやりとりにも苦痛を覚えている。

結婚した姉に長い手紙を出したというので、4期の7月の面接で改めて姉を正面から取り上げてみた。看護師として障害者施設に勤務している姉は、母性的な人と言う。ツギオは小学校から高校まで姉と同じ学校に通っており、よく世話をしてもらった。母親代理的な姉が結婚することに関しては、姉の夫となった人をめぐるエディプスの葛藤は有ったかもしれない。母親代理を自分から奪った敵、ないしはライバルとしての義兄の登場は大きかったであろう。]

#### 第5期 卒業期（4年次）

Coの転勤に伴い、手紙、インターネットを介したメールのやりとりに終始し、終了するまで。

4月より筆者が転勤のため、ツギオの大学のある地方を離れることになり、面接が不可能となった。そこで、学生相談室のほかのカウンセラーに引き継いでもよかったのであるが、とくに本人からの希望はなかった。筆者と2年3ヶ月と長く面接しており、4年次という最終学年を迎えることもあって、もし必要ならば手紙でのやり取りも可能であるという提案をしておいた。また、卒業まで学生相談室で面接して彼に付き合う予定であったが、Coは約束を守れなかったことを謝った。ツギオには移る大学名のみ知らせておいた。

その後手紙は1回来たのであるが、継続しなかった。筆者の大学のホーム・ページから筆者のメールアドレスを探し当て「手紙ではなく大学からメールを送ってもいいですか」という打診があった。そこからツギオの自宅ではなく大学のメールアドレスを使って、筆者の勤務先の個人アドレスへと、メールやり取りが始まった。

メールでは、面接のときも聞かれたように、筆者の言葉の意味が分からないなど強迫的に細かく質問していたが、メールが来てすぐにこちらが返信を出さないと、焦燥感が募るようであった。筆者が出張で数日大学を空け、しばらくメールが読めないことがあった。そういう時はツギオから筆者への注文として、「何日から何日まで不在でメールが遅れると、きちんと理由を伝えるべき」とのことであった。面接ならば1週間とか2週間の間隔があって進行する過程である。筆者はツギオからのメールへ返信を即座に書く必要はないと考えており、大学を不在にすることをいちいちツギオに伝えるつもりはなかった。

ツギオがメールのやり取りをもどかしく感じるようであれば、大学の学生相談室で別のカウンセラーと面接してはどうかと、Coより提案してみた。返事は

なくその後メールは途絶えた。

翌年3月、ツギオが卒業式を済ませたであろう頃、Coは自宅に電話してその後の経過をたずねてみた。母親が電話に出て、Coの長期にわたるカウンセリングに感謝の言葉が述べられた。1回とはいえ母親面接をしていたこともあり、気持ちに通じるものがあった。そのときの母親からの情報では、Coとのメール交換がとぎれてから、卒業までの半年ほどの期間に、ツギオは学生相談室のカウンセラー2名にお世話になったという。ツギオは卒業後、自宅での生活となった。考察

#### 事例1について

入学後数ヶ月、かつみは兄に代わって1級建築士になり家業をつぐという、アイデンティティの早期完了型とも言うべき進路選択に疑問を抱いていた。あまり考えることもなく選んだ進路に疑問をいただくことから始まり、これまで良い意味でも悪い意味でも、最近まで衝突することのなかった家族関係について、話が進展していった。同居し家業を手伝いながら、親への葛藤や衝突、不満をもつことが自然と回避されていたのかもしれない。

高校ではスポーツの部活に明け暮れ、希望の大学の希望学科に入った。自分の問題を何か感じたとしても、毎日の忙しさにひとまず棚上げしたまま、受験勉強や部活のスポーツに打ち込むことで、中学・高校時代を無事クリアしてきたと言えよう。思春期の葛藤を一時棚上げして、高校生活や受験に適応することができたのも、かつみのある種の能力であろう。

この事例は、まずこの進路選択が果たしてよかったかどうかという不安を訴え、鶴田のいう「入学期の移行に伴う問題」を語った。また大学に入って初めて両親と口論するようになり、家族と対立したことが、かつみにとっては一種の外傷的な体験となったことに触れた。中学・高校時代に実は親子関係や家族関係が希薄であったり、自分自身が内面に無頓着であったりしたこと、それが現在の進路のゆらぎと関係するだろうと推測してCoに語った。そして、「自らそのような気づきがあったこと自体すばらしい。」と肯定された。

かつみの「移行に伴う問題」とは、不本意入学であるとか、学生生活への適応困難があるというのではない。高校時代はじめ、入学以前の進路選択のプロセスや主体性に疑問を抱いている。親や家庭環境に流されていただけではなく、外の多忙さにまぎれ、自己の内面と向き合う機会も失っていたのではないかという洞察を得たともいえる。

そしてこれまで片隅追いやられていた夢、「東京に出て舞台の大道具の仕事をする」について語った。それは、地域と家族と家業、地元大学という現実の枠組みから、飛び出そうとするものである。しかし、Coには荒唐無稽な夢とは思えず、「ものづくり」という観点からは建築と同種のように思えたので、共感しやすいかった。かつみは、家族に囲まれて充足していた自分、これまで何の疑いも抱けなかった進路選択、親子関係などがすべて疑問に思え、足元が崩れるような不安を感じていたのであろう。彼女の大学進学は、現代の女子青年らしく、将来の職業や資格取得を前提とした、地に足のついたものである。しかし、大学

にいざ入って見ると、それだけでは満足していない自分を発見したのであった。そういう意味では鶴田の言う、「もう一つの学生自身によるオリエンテーション」が始まったとみることもできるだろう。

ほとんど一方的ともいえるべきかつみの語りを、Co が一貫して興味をもって肯定的文脈で聞くことにより、1 回の面接ながら、おのずと彼女自身の答えが出たような印象を受けた。この事例は、わずか 1 回の面接でかつみは果たして十分内面を語りえたか、疑問が残るところである。また、少なくとも表面的には大きな外傷体験があったというわけではない。しかし、家族や地域から脱していくことの必要性を感じ、合法的家出としての「夢の実現」の主役となって、生き生きと活躍する自分を想像し、物語る内容を受け止めてほしかったといえる。親や大学の友人には、話してもすぐ共感してもらえない内容ではない。

面接過程の中で、親との対立や進路へ疑問を、舞台の夢実現という救済のシーケンスでかつみが語るようになり、これを同様に救済のシーケンスで聴く Co が存在したといえよう。この事例では第 2 幕、第 3 幕を見ることもなく、面接が終了してしまった。その後かつみが、舞台の夢に向かったのか、そのまま大学生活を継続したのかは確認していないが、Co は信頼感をもって様子を見ていて良いケースと判断した。

#### 事例 2 の考察

ツギオが最初から訴えていたような人間関係について、とりわけ同世代との関係作りがうまくいかず悩んでいる青年には、学生相談室の内外で、しばしば出会う。大学キャンパスでは、決して特異な存在ではないだろう。彼らは苦手とするサークル、飲み会、バイトなどに参加しないことを、「一人前でない」と気に病むことも多い。とくに環境移行に伴う、こうした悩みは一般学生にも共通して生じる問題であるが、ツギオは親密な対人関係を求める気持ちが強く、「つきあいたいけれどつきあえない」という葛藤が人一倍強かった。

高校時代からの「人の中に入っていけない」、「常にサブ(控え選手)である」「居座る仲間がない」という意識は、大学生になっても未解決の課題であった。つまり、親密な同世代と仲間関係や親友をもつという青年期前半の発達課題を未達成のまま大学生となった。高校の部活動の頃から感じていた、対人関係に関する違和感、劣等感について、大学で真剣に取り組み解消したいと言う気持ちから、来談したと思われる。

ツギオは当初 Co に対して、大学での「居場所」をさがしに来談したと述べた。「居座る場所」とまではいかないが、ある程度、相談室での信頼関係ができてくると、2 期の途中からは「自分を発見するため」相談室に来ていると変化している。彼は学業に何か支障をきたしているわけではない。むしろ周到に試験勉強するタイプと見受けられた。学生生活の外的適応には成功しており、スケジュールアパシーのように本業からおりるのではなく、アルバイトなどの副業や遊び、コンパなど非公式な場面が苦手であった。それは、何の役に立つのか、何が出てくるか予測がつかない、距離がふいに近くなる関係という共通点があるように思えた。彼の言う大学生らしさとは、「バイトに精を出し、サークル活

動を楽しむ」ことに尽きるようで、二つともできない、あるいは避けている自分に劣等感が強かった。

修学上の支援についてはツギオから求められた記憶がない。実はこちらが支援しようとして、3年次からの専門ゼミへの所属を勧めてみた。それは2年次の後期も終わりに近い頃であり、すでに希望調査が済んだ時点であった。彼はゼミに所属することが対人関係の発達や就職活動の上で最も重要と認識しながら、あれこれ理由を挙げて、ゼミ所属をしないことにすでに決定していた。あらかじめCoに相談するということはなかった。ゼミが自分に変革をもたらすかもしれないが、それに伴う対人的苦痛を想像し、そのような場面を回避するために、はじめからゼミ所属を放棄している。用意周到に、傷つくような環境を回避している。Coに対してはその後、対人関係以外の問題も語られることとなった。面接過程を振り返って考察する。

第1期は、カウンセラーとの関係作りに終わった。ツギオのことばによると、春休みは引きこもってしまい、志願したアルバイトも断られるなど鬱屈していた。2年次(第2期)になり、Coの都合で面接の時間帯が変更、放課後の時間帯にゆったりとした面接がもたれた。面接頻度は一定せず、比較的ゆるやかな面接構造をとっていた。ツギオの遅刻や、すっぽかしは全くなく勤勉に通って来て、自筆のノートや日記を持参しCoに貸すなど、一貫して意欲的であった。学生相談室は内面や家族葛藤を語る場として、まさに「居座る場所」となってきた。1期に比べると、2期の後半から、Coに対して「思ったことを口に出して自由に話す」という点で、彼は当初に比べ、コミュニケーション能力は格段の進歩を遂げた。当初のボツリボツリではなく、話すスピードが早くなったこと、大学生らしい語彙(少々無理もある)、こちらの冗談に対して笑いが出るといった表情が出てきたことなどである。ツギオが満足している状態ではないが、家庭以外にこのような場所と関係を確保したのは、少なくとも高校時代以降、初めてといえる。

この時期は姉が婚約し家にしばらく戻った後に、結婚で家を出るまさに出立の時に当たり、ツギオの家族構造に大きな変化が出て来た時期である。母性的で世話好きな姉に愛着の強かった彼にとって、あらたに姉代理的存在が必要となってきた時期でもある。Coは自分が姉代理的存在になるのではと感じていたが、面接でそれには触れていない。相談室が心の居場所として定着したとの感をもった。この間、授業・試験出席や単位認定など学業に支障はない。

多くの学生は入学後いち早く、学内外に居場所を見つける。バイト先、サークル活動の拠点、所属の研究室、ゼミ仲間など。ツギオは個人的な友人が外に2～3いたが、小集団が苦手ややや対人恐怖的な彼の行動半径は狭く、大学では講義室、ゼミ室、図書館、食堂にとどまり、学外では市立図書館、ビデオ屋、CDショップくらいである。旅行などで遠方に出かけ外泊するといった、体験は全くない。家から出立していないのである。家以外で最も居心地の良いと思われるのは、図書館(他者の存在に晒されながらも自分の世界に埋没可能な表の引きこもり場所)であった。

この時期には、親子関係の訴えが多いが、思春期的心性から脱し切れない未熟な印象が強い。ツギオは母親に対して、自分がどんな資格をとるべきか、進路をどうするか一緒に考えて欲しいと頼み、それに母が応えられないでいると、責任回避だと非難する。(母親の)自分への愛情が感じられない、意志疎通を欠くなどと否定的であり、母を矮小化しがちである。ここには救済のシーケンスではなく、汚辱のシーケンスで語る彼がいる。

繰り返し訴えられたがあまり共感できず、第2期の終わりにCoは、ツギオの言葉に共感しにくいところがある点を述べた。それを聞いて、ツギオの表情が固くなったものの、反論はなかった。「外に友だちとかいたら、親のことでこんなこと言っていないだろう。」とも言う。父親には一応肯定的だが反発も感じるようで、多くの青年が中学時代など思春期に抱く両価的葛藤を述べている。

ところで、ツギオを初めは健康度が高い青年と感じていたのだが、第2期の終わりから3期にかけては、彼の内面の不安定さが目立った。両親をはじめ周囲への依存性が高く、三者関係や依存性が満たされない対人関係から撤退し、傷つきそうな場と対人関係を回避する傾向が強いことがより鮮明となる。また高校時代から程度の軽い家庭内暴力(親への暴言、物を投げるなど)があったことを語った。それは今も少し残っており、まさに思春期的心性を脱していない点、さらに自我同一性の拡散状態(自分は将来何をやっていいのか、何が生きがいになるのか分からず憂鬱)、男性性の未熟が明らかとなった。

小学校から高校まで姉と同じ学校に通い、青年期前半の同一化の対象が、内なる男性性(アニムス)優位の姉であった。ところが高校の後半から大学進学の際にかけて、姉がモデルとなりえないことに気づく。代わって同一化の対象となる男性性のモデルや、不安を共有する同性の仲間関係をもつことが出来ていなかった。

つぎの3期には、ツギオは姉の結婚式に参加、子ども時代から格別の愛着をもってきた姉との別れが、感動とともに救済のシーケンスで語られ、Coがそれに共感できた。

姉をモデルとして青年期前半を過ごしてきたという彼は、家庭内で長男を意識させられることより、第2子そして「永遠の子ども」として遇されてきたのではないかと。同世代に対しても「すでに出来上がった関係に入っていくとき、自分は常にセカンド、サブである」という思いの源もここから来ている。

ツギオが姉の結婚式に出席した時の緊張感(足ががくがく、祝宴の食事ができず必死にこらえていた)は、大学入学当初に、アルバイト先で呈した状態に近い。ツギオにとって、この時成人後初めて大人の男性として、双方の親戚にお目見えする状況が問題だったのではないかと。花嫁の弟というより、この家の次世代を担う長男として、親戚集団に加入するという通過儀礼(initiation)的状況におかれたのではないかと。

第4期になり、中断後、Coとツギオ双方の思いが一致したこと、また面接のあり方をツギオと確認することによって、信頼関係が強化されたように思う。ツギオはCoを母親に引き合わせ、Coの共感を得ようとした。この出会いは、Co

も望むところであったので、率直な思いをツギオに返すと同時に、母には家族の対応にも少々問題があることを伝えた。

Co は「母は何か言うとすぐへこんでしまう。強い母でいて欲しい。」というツギオの言葉が母に会ってよく理解できた。救済のシーケンスではなく、破滅のシーケンスでツギオの語りを聞く母親を、Co に会わせることにより、何とかして救済のシーケンスで語りを聞いて欲しいことを伝えたかったのであろう。

ところでこの時期に、彼は自分を対人恐怖症という見立てをしていたが、内沼幸雄の『対人恐怖症』講談社現代新書を面接に持参した。「あなたの場合、対人関係を巡る葛藤が普通の人より強いとは思いますが、対人恐怖症という診断は Co にはできない」と伝えている。

対人恐怖症の人が最も苦手とする継続的な小集団、小人数のゼミ参加については、彼はそれほど苦痛ではなく、何とか参加できる。それに対して雑踏のような人ゴミや初対面の人が苦手である。また 1 対 1 で継続的に関わりをもつことが可能ではあるが、ささいなことで傷つきそうになるとそれ以上関係をもたないので、真に深く親しい友人ができて長続きしない。

診断として対人恐怖症、依存性人格障害なども考えられるが、どちらかという回避性人格障害に近いと考えた (DSM-IV, 1995)。回避性人格障害のタイプは、基本的に依存性、対人希求性が強い人である (大野 1995, 下山 1997)。そうした欲求が満たされないと、人一倍傷つきやすく、傷つきを回避しようとしてそのような可能性のある場を回避していく。その結果として、家族以外に親密な対人関係を展開できないなどの特徴をもつ。

ツギオは対人関係とくに 3 人以上の関係で過度に傷つきやすく、少し深くかわる可能性のある場でどこまで立ち入るのか分からず、居場所がないと感じ、そのような場から撤退する。同様に傷つくと予測される、アルバイト、専門ゼミ、野球仲間、親しい友人関係を回避してきた。

以上のようにツギオには何らかの神経症あるいは人格障害的な傾向は認められるものの、学生相談室では必ずしも、診断名を特定し医療モデルに当てはめてツギオにかかわって行く必要はないと考えた。また、彼は服薬などには拒否的であることが、面接で述べられた。

結局、学生相談室は仮の居場所とはなったが、Co 自身、彼の述べた「人生の師匠」になることはあまり念頭になく、そうした同一化の対象となることは不適當に思われた。「人生の師匠」になり得ない Co に、ツギオが苛立ちを示したのが 3 期の終わりの中断であったと考える。

Co との関係を深め、ツギオ自身の自発的意志や肯定的感情を育て言語表現させて、行動の手掛かりとできるよう援助して行く方針であった。それまでの面接においても、自発性や内発的動機による行動を評価してきた。しかし彼は、自分の感覚や内的欲求に従うことより、何らの規範なり理想像から外れることをよしとせず「本道からずれてしまった」と言っていた。「普通の大学生になれない。普通の青年として普通のつきあいができない」といったように、「普通」からのずれを強く意識している。そこで「普通の大学生とは」と聞いてみると、「ア



アルバイトとサークル活動ができること」を絶対条件としている。自分ができている大学の授業出席や、図書館での勉強など、学業との関わりはほとんど評価されていない。

ツギオは一時、簿記の勉強に打ち込んでいた。自発的なしかも楽しめる活動として、Co も支持してきた。しかし、2月にインフルエンザで体調を崩したため、大学の定期試験も追試で受けたのだが、父親の後押しのなかったという簿記2級検定を、申し込みながら「まあいいか」と回避してしまったという。前年6月には3級の簿記検定ために準備していたにもかかわらず、本人いわく「試験日を間違えていて」、実質的には試験を回避している（後半には3級に合格）。

簿記検定2級は大学3年生にとっては、ややレベルが高く、合格する自信もなかったであろう。3級のときとは、取り組みの姿勢が異なっている。「簿記は性に合っているので楽しんで勉強している」と内発的動機づけの文脈で話していたが、2級に取り組むに当たって「この資格をとることにどのようなメリットがあるか、ないのじゃなかろうか」と否定的になっている。

2級にチャレンジすることを誰かに勧められたのではなく、ツギオの意志で3級に合格したら2級と、step by stepに取り組んでいた。ある時点で合格の見通しが無いことが判明したので、受験しなかったのではないか。ここでは、成功するという確信が持てない限りは、挑戦しないという態度が認められる。

傷つくことを恐れて失敗回避のため受験断念したのではと感じながらも、面接時点でCoがその推察を言語化して、ツギオの直面化を促すことはしていない。また基礎ゼミでの体験が土台となって、3年次からの専門ゼミに加入すると期待していたが、これもゼミでの旅行や合宿、親密な対人接触を恐れて回避されている。事前に「ゼミに入りたいが入りづらい。どうしたらよいか」などの相談はない。ツギオが面接過程で触れたように、ゼミは深く親密なタテ・ヨコ・ナナメの対人関係を結びやすく、進路の問題に具体的に取り組んだり、就職情報を得たりする場であり、教授も勧めていると彼は十分承知している。

これまで授業としてのゼミへの出席は、当てられることなく受け身であれば別に問題ないという。実際、社会学の基礎ゼミへの出席に関しての困難は多くは語られなかった。3人でのグループ発表と質疑応答もなんとかクリアしており、苦痛を感じたのはゼミ仲間とのコンパ、飲み会などの、非公式で親密な対人関係であった。また人気の講義が多人数でやかましく、質問されるとか雑踏のような雰囲気であれば、とてもいやで欠席しようかと思っている。「人ゴミが嫌い」で多数の一般人が集合する資格試験会場、講演会場なども苦手な一人では行けない。

大学外ではあるが、高校の同級生で野球仲間の受験生T、M大学生、の二人が親しい友人関係を持てた時期もあった。ただ自分から電話などはめったにせず、誘われると出向くなどあくまでも受け身である。また後にそれぞれに対して「むかつく」理由が出てきて、二人とも疎遠になった。Tは社交的な人で、その多数の交友の中でツギオは「自分はあくまでサブだな」と感じる。他の友

人が話題に上ると「自分には友人がT以外にいないのに、Tにはたくさんいる」ということで、ひどく傷つくと言う。2者関係を越える友人関係において、常に劣等意識をもっている。以上のように、同世代間の、対人関係の積み重ね、深まり、広がりなどに困難があり、いまだに家族関係に終始している。

アパシーのような選択的回避ではないが、対人関係からも自己が埋没できるような音楽や簿記の勉強などからも撤退し、回避傾向が強くなって不安が高まっている状態が、2期の終わり頃から3期にかけて続いていた。ただし、自宅へのいわゆる「ひきこもり」はない。

4月(第3期)から intensive に関わろうと面接の間隔を狭めたところ、Co との深い関わりによって変化するのを回避しようとしたのだろうか、3回目にして「共感してもらえない、アドヴァイスがない」ことへの不満がぶつけられ、面接をやめることも考えたと率直に述べられた。Co は少々彼に疑問を覚えたが、ツギオが否定的な感情も出すことができたのは Co との関係の深まりと思った。後日、母親面接で分かったことだが、母に対してもしばしば「分かってもらえない」と不穏になっていた。

アルバイトでの外傷的体験の反芻、成人式への不参加へのこだわり、姉の結婚式での彼の緊張感などから明らかになってくるのは、子どもからおとなへの移行状況での困難である。現代では個人的に体験すると考えられる、イニシエーション状況でツギオはパニックになりやすく、その状況を回避したい願望が強い。母性的な守り(父母、姉)から抜け出て、一人の人間としての試練を集団の中で克服して行くことができていない。ツギオはそこに問題を感じながらも、ときには退行する。相談室は家庭から一歩出た居場所であり、それは大学という守られた社会の一部でもある。そういう中間的な領域を足場に、Co との関係をサポートとして、次なるイニシエーション状況の克服をめざすべきであると考えていた。

そのとき Co に求められていたのは、受容的な母性原理を土台としながらも、かなり父性原理が重視された、両性具有的役割であった気がしている。その意味で3期と4期の間の中断は、彼の依存欲求を満たさず、また面接を彼の意志で中断したことは、切断という意味で、父性の発揮であったと考える。その後、彼の提案で母親面接し、さらに児童期から青年期前半の姉への依存を語るツギオを受容的に聞いていったのは、Co の母性的役割による。姉を崇拝するのは対照的に、母親を極端に低くみており、それでいて自分は性格が母親似とし、自己評価の低さにつながっている。母親自身も、育て方が悪かったので家庭内暴力を受けたなどと自責的である。母は回復や発達といった救済のシーケンスで、ツギオをとらえることができない。

さて筆者は、彼の学生生活を卒業までサポートすることはできず、3年次で面接を終了した。学生相談室での面接にブランクがあった後、別のカウンセラー2名が対応したが、彼は卒業後、就職しなかった。すでに卒業に必要な単位は3年次で全部取得しており、専門ゼミに所属して卒業研究に取り組み、卒業論文を執筆するという選択をしていなかったこともあり、そのまま卒業できたという。

3年次に少し取り組んではいたものの、あまり意欲的でなかった就職活動については、4年生になってもツギオは取り組まなかった。就職したいという願望があっただけでかなえられなかったというよりは、第4期（3年次）の面接で語っていたように、生業をもつとか、就職することの意味をみいだせなかった。ただ就職する気持ちが最初からなかったわけではない。「社会に出るためには対人関係が大切。そのためバイトやサークルに入らなくては」「どんな資格をとっておくべきか」の発言は、社会に出ることを前提としていた。

一般に大学では、卒業期の課題として学業では卒業研究や卒業論文の提出があり、社会に出て職業人として出発するための課題としては、就職活動と進路選択があるとするなら、ツギオはそうした課題にあまり取り組まずして卒業した。ただ単に大学を卒業することが彼の目標であるのなら、それは達成されたことになる。

筆者の解釈を述べてみよう。就職ガイダンス、履歴書作成や自己分析、模擬面接などの体験や就職課職員とのやりとりなどを体験していくうちに、ツギオは「自分には大学時代これをやったというものがない」「自分の短所は分かるが長所はないから自己PRができない」などの理由を挙げて就職活動を嫌がっていた。また「自分も働かなくてはいけないのだろうが、何のために働くのか、仕事をもつことの意味がわからない」との発言もあった。就職活動では、会社訪問や面接など対人接触が避けられず、そこで傷つくことも多いと知るにつけ、そこからも回避行動をとったものと思う。

ツギオはこれまで主に父親の収入で生活して大学に通い、母親の家事労働によって日常の衣食住を与えられてきたのであるが、彼は「生活費を稼ぐ」という必要もあまり感じていない。旅行に行きたいとか、何か買いたいとも思わないという。60歳定年の父親が65歳くらいまでならというので、親の世話になるつもりという。では何をしたいのか。4年次のメールのやり取りにおいて、「卒業後に向けてのプランが何もない状態をどう思うか」とのCoに対する答えは、「とにかく、このままの状態で行く」というものであった。卒業はするが、社会には出たくないということらしかった。

#### まとめ

10代初期に始まる自分の青年期について、大学生くらいの年ごろになると、さまざまに回想し語りたくなることがある。これまでの家族関係や友人関係を自ら振り返ることは、中学・高校時代にはその余裕もなく、大学生となって試みられる。今日の大学では、親しい友人関係を得られても家族の問題や込み入った心情を打ち明ける機会が少ない。現代の若者の風潮で、そうした深刻な話題は敬遠される。秘密を打ち明けられること自体、「暗い」とか「うざったい」などと拒否されることもある。筆者は、学生相談室が「語る」場所として、そして受け止める場所として、大学内で重要な役割をもつと考える。

取り上げた2事例のうち、事例1ではクライアントの語りが豊かであり、Coは青年期の発達のプロセスとして肯定的に聴くことができた。移行に伴う親子間の対立や進路への葛藤が、青年期の発達課題として不可欠なものであり、こう

した混乱は人格の発達として認識すべきとの態度で聴いた。クライアントは青年期前半からの夢を救済のシーケンスで語り、受け止められたと解釈する。

事例 2 では、クライアントの自己不全感が強く、学生生活のなかで、あまり充実感や生きがいを感じられなかった。また自我同一性拡散の中に漂っているように思われる。その背景として、対人関係に傷つきやすく、対人関係や集団を回避しがちな傾向、思春期的な親子関係、本人の依存的性格や強迫性性格がある。彼は対人関係による傷つきだけではなく、アルバイトでの心身の苦痛、試験の失敗や就職活動における緊張感、成人として集団に加入することなどに懲りて、同様の状況を強迫的に回避しようとした。

彼が2年次から3年次にかけては、高校時代や入学当初の外傷的経験の語り直しを試み、学生相談の場で多くを語った。十分な語り直しはできなかったが、クライアントは簿記に打ち込むなどして種々の達成感を得られた。また親子関係の葛藤も明らかになったが、姉が常に発達や回復といった救済のシーケンスで親から語られるのに対し、対比的にクライアントは甘えや逃避といったシーケンスで語られ、それを修復できないでいた。さらに卒業というゴールに向けて面接の深まりが見られる卒業期に、Co が面接を継続できず、共感的に語りを聴く存在を欠いてしまった。こうして、大学卒業という目標の達成は実現されたが、職業選択、対人関係の発達など、青年期の様々な課題を残したまま彼一人の歩みを見守る事となった。

彼が青年期前半の課題を何度も語り、学生相談室のCo がそれをサポートして、学生生活への適応や青年期の発達課題の達成に一定程度の役割を果たしたが、回避という彼のキーワードを切り崩すことができず、成人期に送り込むまでに時間切れとなってしまった。面接では、彼がただ語ることに疑問を示したり、十分な語り直しを促したりすることが不十分ではあったが、共感しあうこともできた。さらにいえば、このように健康度が低い事例では、現実的課題の達成にこだわらず、内面をより深く聴いていくことが重要と考える。

なお事例 2 については、一部を第 18 回日本学生相談学会大会（2000 年 5 月大妻女子大学）にて発表した。また第 38 回全国学生相談研修会（2000 年 12 月）において、事例検討の機会をもった。その際、貴重な助言をいただいた、峰松修先生、塚田展子先生に感謝申し上げます。

文献

藤原勝紀 1998 学生相談の大学における位置と役割—これからの学生相談像を求めて.

河合隼雄・藤原勝紀（責任編集）学生相談と心理臨床. 金子書房, 11-21.

森岡正芳 1999 精神分析と物語(ナラティブ). 小森康永・野口祐二・野村直樹 編著 ナラティブ・セラピーの世界. 日本評論社, 75-92.

森陽子・梅村祥世・川島美保・曾我博・仲村安善・布施佐代子・村瀬美代子 1998 短期大学における学生相談の役割—中京短期大学での20年にわたる実践から—.

中京短期大学紀要論叢, 29 別冊, 1-32.

日本学生相談学会特別委員会 2001 2000 年度学生相談機関に関する調査報告.

学生相談研究, 22(2), 72-107.

大野裕 1995 人格障害の類型: クラスターC. 福島章・町沢静夫・大野裕(編), 人格障害. 金剛出版, 134-159.

下山晴彦 1997 臨床心理学研究の理論と実際. 東京大学出版会, 131-134

高橋三郎・大野裕・染矢俊幸訳 1995 DSM-IV 精神疾患の分類と診断の手引き.

医学書院

鶴田和美 1991b 大学生の個別相談事例から見た入学期の意味—学生自身が行う「もう一つのオリエンテーション」とその援助. 名古屋大学学生相談室紀要, 3, 3-14.

山口智子 2001 学生相談における時間的・空間的特性を活かした関わりの工夫—卒業期の傷つき体験の語りと自己の修復—. 学生相談研究, 22, 1, 44-52.

(2002年9月14日受理)

